

第1章 富士市の概要

1. 自然的・地理的環境

(1) 位置

静岡県は、日本列島の太平洋側の中央域、東京と京都を結ぶ東海道の間にあたります。静岡県の東部、富士山の南麓に位置する本市は、浜松市・静岡市に次ぐ県内第3位の人口規模です。

北に日本一高い富士山を仰ぎ、南に日本一深い駿河湾を望み、西に急流として知られる富士川が流れ、東に貴重な植物が分布する浮島ヶ原が広がっています。本市の市域は東西23.2km、南北27.1kmにおよび、その面積は244.95km²となっています。駿河湾に面した全長10kmの海岸線から、富士山の山頂直下に位置する市域の北端までの標高差は約3,680mにおよび、海岸線から富士山までを市域に含む唯一の都市です。

また、本市は、東海道新幹線新富士駅や、東名高速道路や新東名高速道路の各インターチェンジを有し、東京までの所要時間は新幹線で約70分、高速道路で約90分であり、首都圏等にも容易にアクセスできる交通の利便性に優れた広域交通の要衝となっています。

[富士市の位置]



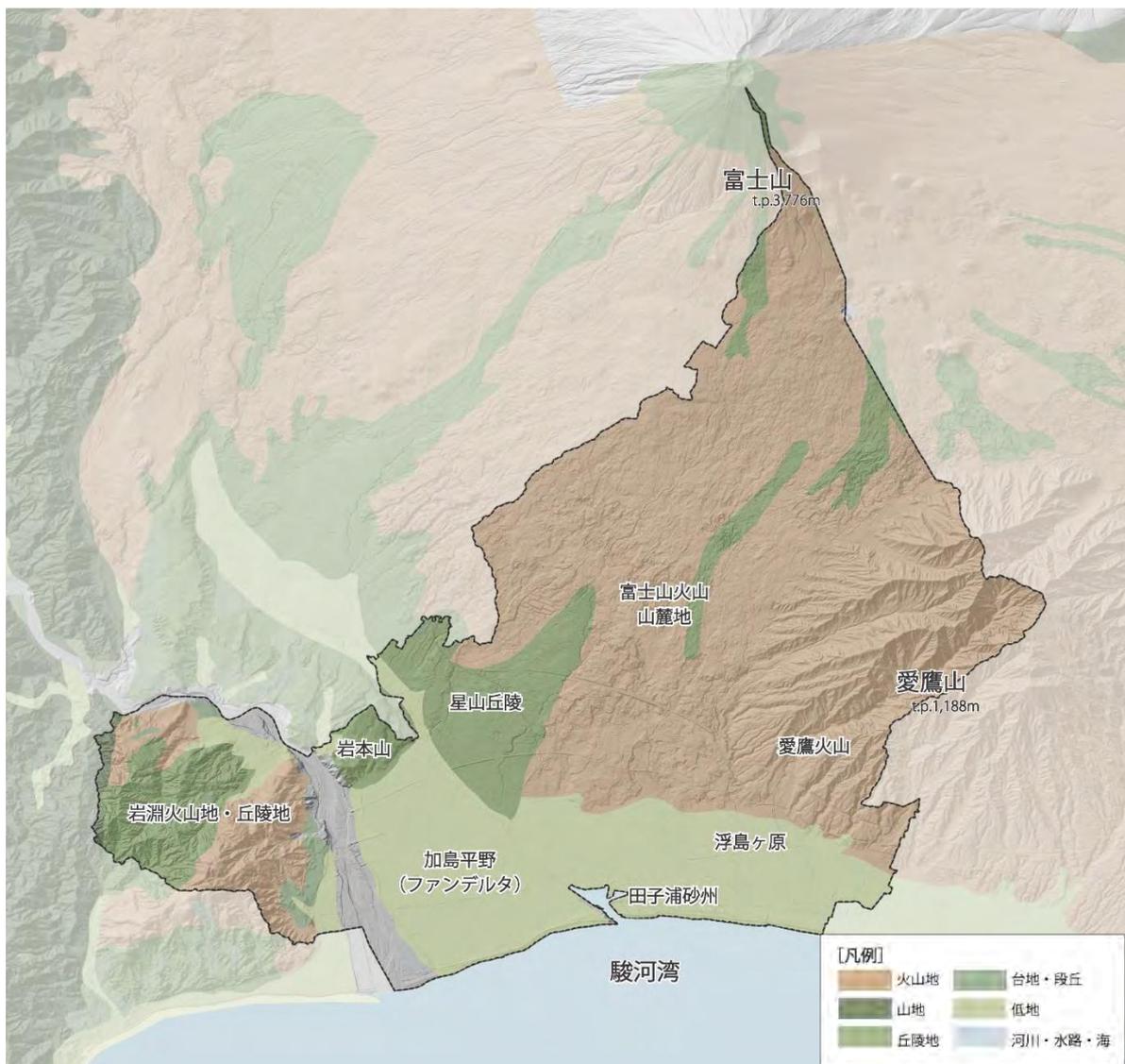
出典：富士市の都市計画2017
国土地理院地図を基に作成

(2) 地理的環境

① 地形

本市の東部および北部は、富士火山および愛鷹火山により形成された斜面地帯であり、南に緩やかに傾斜しています。一方、西部、中部、南部は、加島平野（ファンデルタ）や浮島ヶ原が広がるとともに、沿岸部では東西に細長く駿河湾を縁取る田子浦砂州が形成されています。また、富士川の西岸では、松野盆地といった、一部の平坦地および河岸段丘の段丘面を除いては、ほとんどが急峻な山地となっています。

[富士市の地形]



出典：国土交通省 50 万分の 1 土地分類基本調査（GIS データ）を基に作成

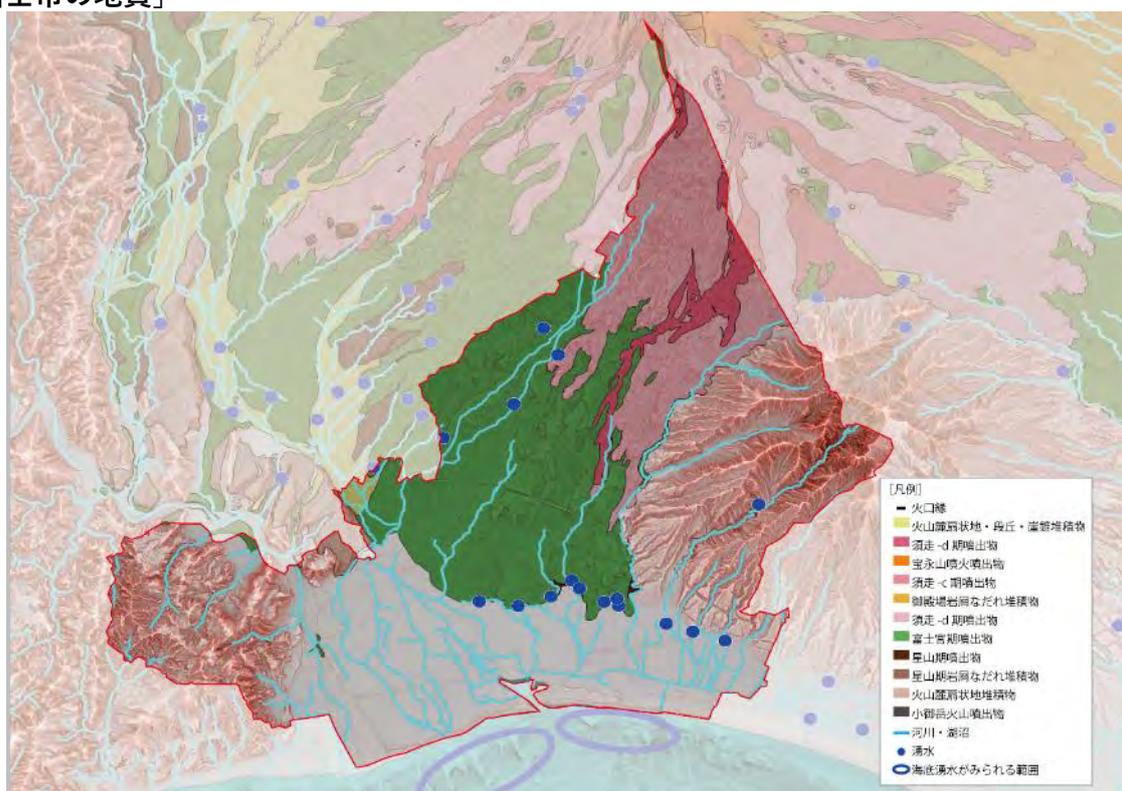
②地質

日本列島は、本州の中部を横断する大きな溝、いわゆるフォッサマグナにより、地質学的に西南日本と東北日本に分けられています。本市は、このフォッサマグナ西側の境界断層である糸魚川—静岡構造線の南東部に位置します。ここは特に、北米プレートとユーラシアプレートの境界に位置しており、富士川河口断層帯と呼ばれています。また、それに接するように、富士火山、愛鷹火山、岩淵火山（富士川西岸）が存在しています。

本市の北部の大部分には、後期更新世から現在にかけて活動している富士山の火山噴出物や溶岩流が分布しています。また、東部には、中期から後期更新世に活動した愛鷹火山の噴出物、富士川の西岸には、前期から中期更新世に活動した岩淵火山の噴出物が主に分布しています。それ以外の、本市南部および駿河湾に面した地域、いわゆる低地帯については、主に富士川の堆積物からなる沖積層が分布しています。

こうした地質分布からもわかるように、本市の北部および東部の山麓地は火山に関連する災害、本市の低地帯は水に関連する災害（洪水・高潮等）がたびたび発生してきた地域といえます。

[富士市の地質]



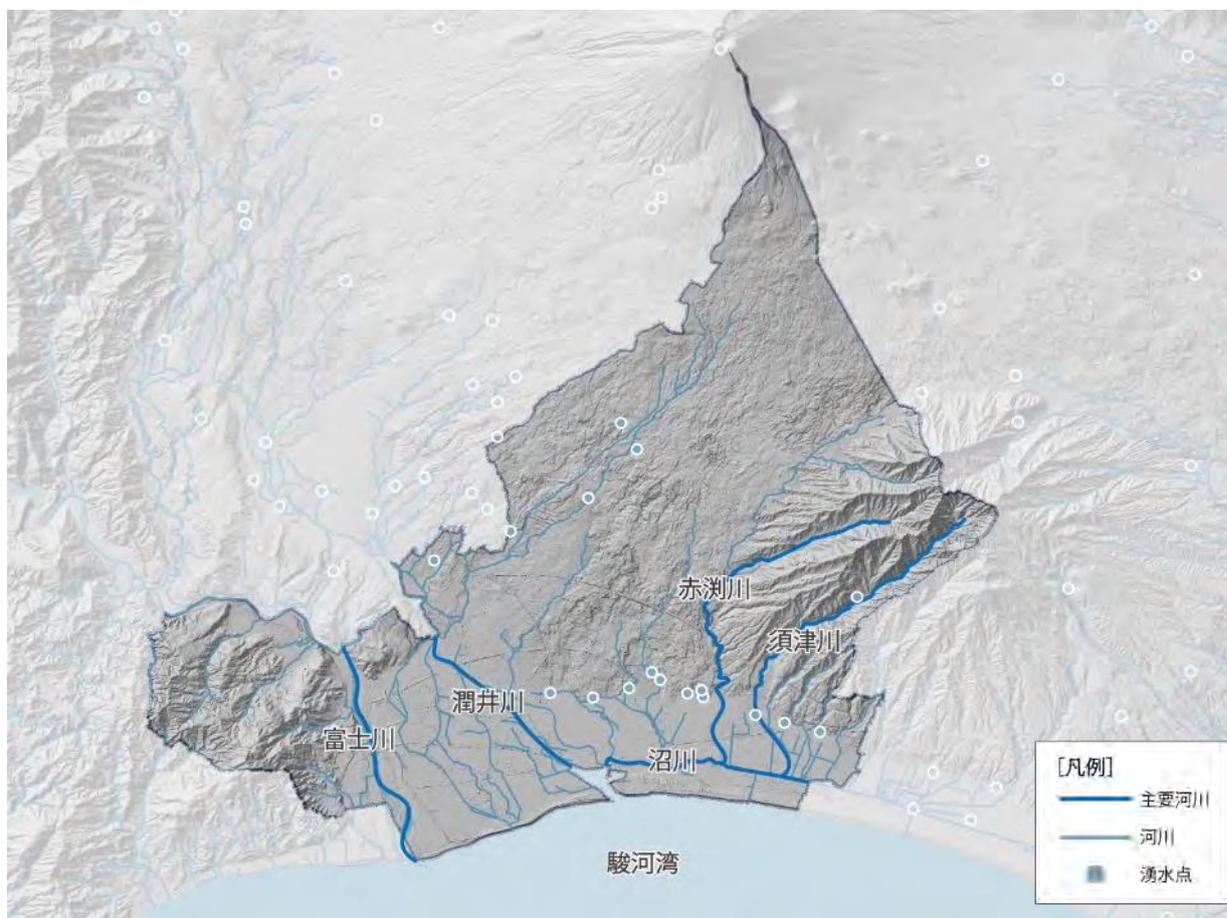
出典：静岡県富士山世界遺産センター提供資料「富士山の地形・地質と湧水の分布」

③水系

本市の地質は大きく分けると、富士山や愛鷹火山に由来する地質と、低地帯の地質の二つに分けることができますが、両者の境界では、富士山や愛鷹山の伏流水を水源とする湧水が数多く存在し、本市の主要産業である製紙業を支える機能を有するとともに、地域を特徴づける要因の一つとなっています。

こうした豊富な湧水に加え、市域の西部には長野、山梨に源流をもつ富士川が北から南へ流下し、富士山の^{おおさわくずれ}大沢崩を源とする潤井川とともに駿河湾に注いでいます。また、本市東部の主要河川としては、愛鷹山に源流をもつ須津川や赤渕川、浮島ヶ原を西流する沼川などが挙げられます。さらに、特に低地帯では、こうした主要河川から用水路を介して、農業用水や工業用水が取水・配水されており、地域の農業や工業を支えています。

[主な河川と湧水点の分布]



出典：国土地理院起伏陰影図、国土数値情報、湧水点データ（富士市提供）より作成

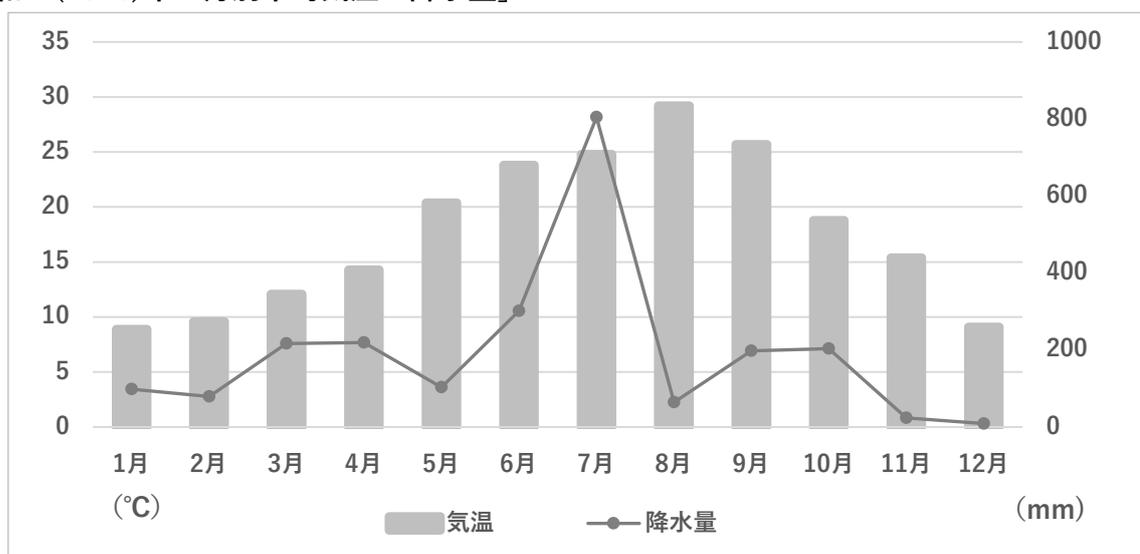
(3) 気候

本市の大半は、南面する太平洋の影響を受けて温暖湿潤な海洋性気候となっています。夏は雨が多く、山麓では、時に濃霧が発生します。冬には晴天が続き、平野部での降雪はほとんど見られませんが、標高の高い山間の一部は高山特有の気候を示すため、しばしば積雪が見られます。風は全般的に弱く、移動性高気圧に覆われたときは、概ね9時頃と18時頃を境に海陸風かいりくふうが発生します。

平成28(2016)年から令和2(2020)年の5年間ににおける平均気温は17.4℃であり、1月が最も低く、8月が最も高くなっています。5年間の降水量の平均は1,972mm(全国平均は約1,700mm)であり、梅雨の6月・7月と秋雨および台風シーズンである8月・9月の降水量が多くなっている一方で、12月から2月の冬季は少なくなっています。

また、本市の市域は標高0mから3,680m(標高の最も高い居住地は750m)まで及んでいることから、居住地の標高差により、年間平均気温については最大4℃から5℃、年間降水量については、最大約600mmの違いが見られます。こうした気候の変化と、先に述べた地理的環境の特徴に応じて、本市の多様な植生が生み出されています。

[令和2(2020)年の月別平均気温・降水量]



出典：富士市統計書（令和2年度版）より作成

(4) 植生

本市は、温暖湿潤な海洋性気候の中であって、駿河湾の海際より、富士山の山頂直下（標高3,680m）までを市域とします。また、標高差に伴う気候の垂直的变化が大きいことにくわえ、市域がフォッサマグナの境界に位置していることから、本市は植物相の多様性に富んだ地域といえ、2,656種の植物が確認されています（このうち、日本固有種は620種）。

これらの植物の特徴を生育環境ごとに見てみると、海岸は、コウボウムギやハマヒルガオなどの^{かいひんぐんらく}海浜群落^{かいひんぐんらく}が確認できるとともに、クロマツからなる海岸林は、人の手によって長い期間維持・管理され、海岸部を象徴する景観が形成されています。

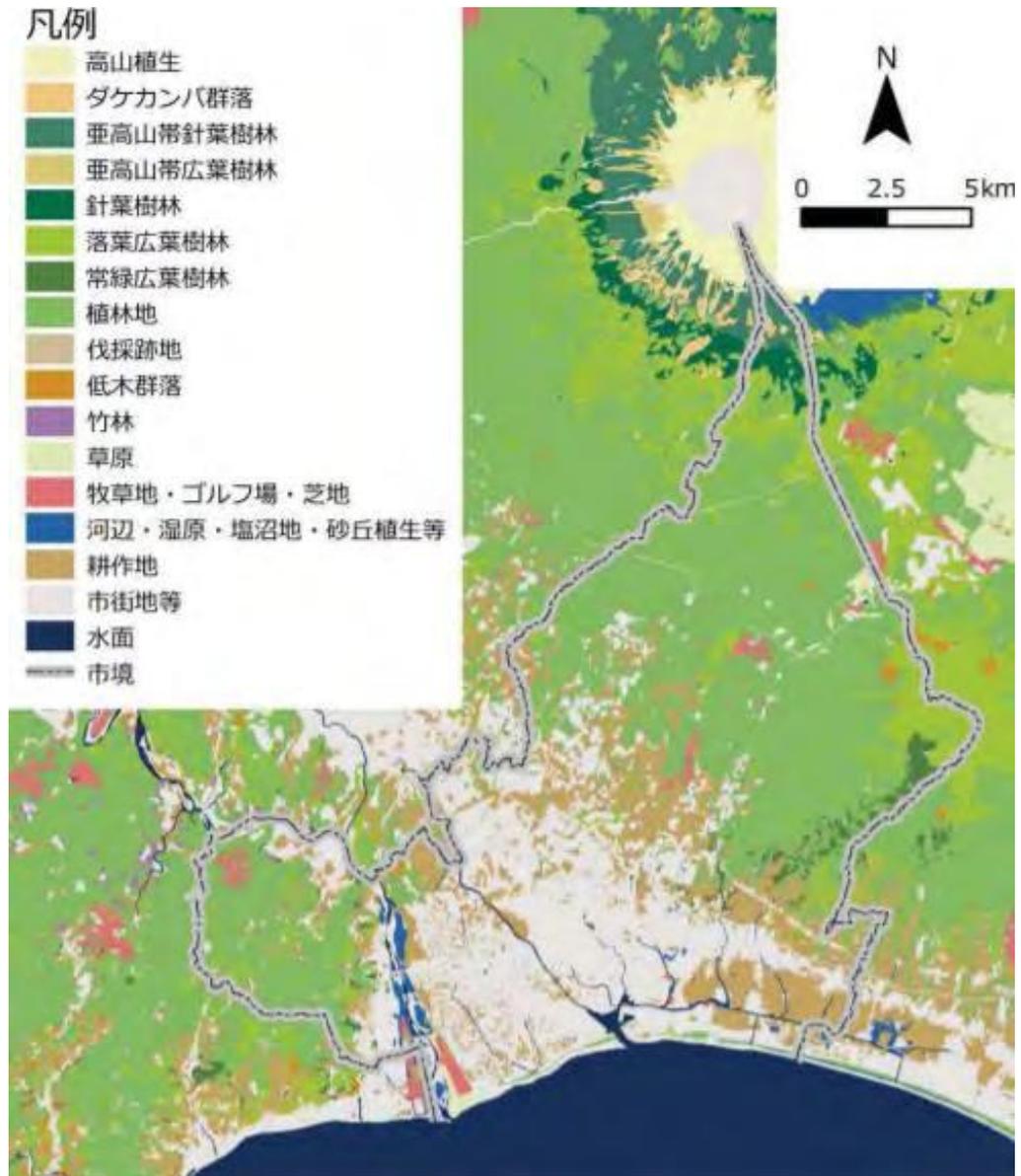
浮島ヶ原の湿地は、海拔0m地帯が広がっており、現在も残る湿地帯には、ヨシ群落や、過去に頻繁に洪水が発生していたことを裏付けるノウルシ群落などの水生植物の群落が成立しており、その一部が貴重な植物として浮島ヶ原自然公園において保護されています。

平地部は、その大部分が市街地や耕作地となっており、市街地化の進行によって多くの緑地が失われ、公園や社寺林などに、シイ類やカシ類などの常緑広葉樹林が残されている程度です。しかし、それらの一部は天然記念物や保存樹木として大切に守られています。

一方で、平地部を流れる急流河川の富士川、低地を流れる潤井川や沼川、溪流河川の須津川などの河川は、水辺を生息・生育の場とする生物にとって重要な環境となっています。山地部のうち、標高が低い山麓部である愛鷹山西麓には、比較的自然植生に近い常緑広葉樹林が残されている一方、富士山南西麓にはスギやヒノキなどの常緑針葉樹の植林が広く分布しています。また、富士川の西に位置する^{かなまるやま}金丸山から^{あまごいやま}雨乞山にかけては、植林、常緑広葉樹林の自然植生、落葉広葉樹の二次植生、果樹園などの耕作地といった様々な植生がモザイク状に分布し、人の手によって里山として利用されてきた状況を知ることができます。

山間部のうち、比較的標高が高い愛鷹山山頂付近や、富士山中腹では、落葉針葉樹のカラマツの植林が広がっていますが、ブナ・ミズナラなどを中心とした自然植生の落葉広葉樹の天然林も比較的まとまって残されています。富士山ではさらに高くなると、亜高山帯植生であるカラマツやシラビソなどの針葉樹の自然植生に推移し、標高が高くなるにつれて樹高が低くなり、標高2,500m付近の森林限界付近では、風と積雪の影響により、カラマツが地面を^は這うように生育する姿が見られます。森林限界を越えると植物はほとんど見られなくなり、オンタデなどの高山植物が点在する高山帯の自然植生へと変化します。

[植生図]



出典：富士市緑の基本計画（第二次）

[本市の地形と植生分布]



出典：富士市緑の基本計画（第二次）

2. 社会的状況

(1) 市域の変遷

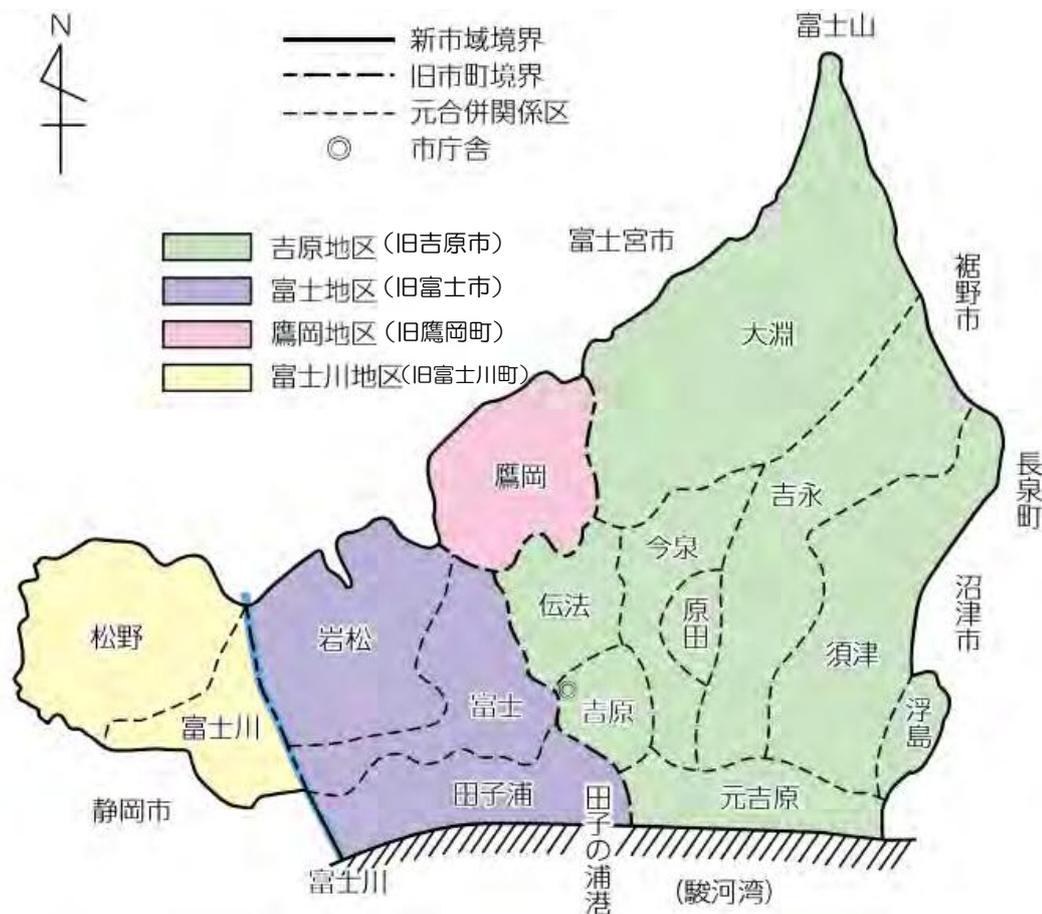
明治 22(1889)年 3月 1日の町村制の施行により、富士郡吉原町ほか 12 村、庵原郡富士川村・松野村が誕生しました。

その後、明治 34(1901)年に富士川町、昭和 4 (1929)年に富士町、昭和 8 (1933)年に鷹岡町がそれぞれ町制施行により誕生しました。

吉原町は昭和 15(1940)年から 17(1942)年にかけて周辺の村と合併し、昭和 23(1948)年には市政を施行し、吉原市となりました。また、富士町は昭和 29(1954)年に周辺の村と合併し、富士市となりました。吉原市では、昭和 30～31(1955～1956)年にかけて、さらに周辺の村と合併しています。昭和 32(1957)年に富士川町と松野村の合併による新しい富士川町が誕生し、また、昭和 41(1966)年には富士市、吉原市、鷹岡町の合併により新しい富士市が誕生しました。

平成 20(2008)年 11月 1日に、富士市と富士川町が合併し現在の富士市（下図の新市域境界で示された範囲）が誕生しました。

[市域の変遷図]



出典：富士市の都市計画 2017

[市域のうつりかわり]

年月日	合併町村名等	人口 (人)	世帯数 (世帯)	面積 (km ²)
明治 22(1889)年 3月 1日	富士郡 吉原町 誕生	2,923	534	0.18
〃	富士郡 島田村 誕生	1,063	184	2.42
〃	富士郡 伝法村 誕生	2,622	740	6.43
〃	富士郡 今泉村 誕生	4,223	660	12.12
〃	富士郡 元吉原村 誕生	2,822	469	5.62
〃	富士郡 須津村 誕生	3,232	496	26.68
〃	富士郡 吉永村 誕生	3,290	540	37.55
〃	富士郡 原田村 誕生	1,612	271	4.45
〃	富士郡 大淵村 誕生	2,132	400	74.70
〃	富士郡 加島村 誕生	5,154	870	9.70
〃	富士郡 田子浦村 誕生	5,251	874	12.20
〃	富士郡 岩松村 誕生	3,591	611	8.65
〃	富士郡 鷹岡村 誕生	-	-	10.23
昭和 4(1929)年 8月 1日	富士郡 富士町 誕生(加島村)	10,155	1,803	9.70
昭和 8(1933)年 1月 1日	富士郡 鷹岡町 誕生(鷹岡村)	8,472	1,412	10.23
昭和 15(1940)年 4月 1日	吉原町が島田村と合併	-	-	2.60
昭和 16(1941)年 4月 3日	吉原町が伝法村と合併	-	-	9.03
昭和 17(1942)年 6月 14日	吉原町が今泉村と合併	-	-	21.15
昭和 23(1948)年 4月 1日	静岡県 吉原市 誕生(吉原町)	31,153	5,834	21.15
昭和 29(1954)年 3月 31日	静岡県 富士市 誕生 (富士町、田子浦村、岩松村が合併)	40,943	7,334	30.55
昭和 30(1955)年 2月 11日	吉原市が元吉原村、須津村、吉永村、原田村と合併	-	-	95.45
昭和 30(1955)年 4月 1日	吉原市が大淵村と合併	-	-	170.15
昭和 31(1956)年 4月 1日	吉原市が原町の大字船津、西船津、境と合併	-	-	174.56
昭和 41(1966)年 11月 1日	静岡県 富士市 誕生 (吉原市、富士市、鷹岡町、2市1町が合併)	164,932	37,776	215.34
昭和 63(1988)年 10月 1日	国土地理院の測量により 1.25k m ² 減	-	-	214.09
平成 14(2002)年 10月 1日	田子の浦港内公有水面埋め立てにより 0.01 km ² 増	-	-	214.10
平成 20(2008)年 11月 1日	庵原郡富士川町と合併	261,504	95,796	245.02
平成 26(2014)年 10月 1日	国土地理院の測量により 0.07k m ² 減	-	-	244.95

出典：富士市総務課 資料

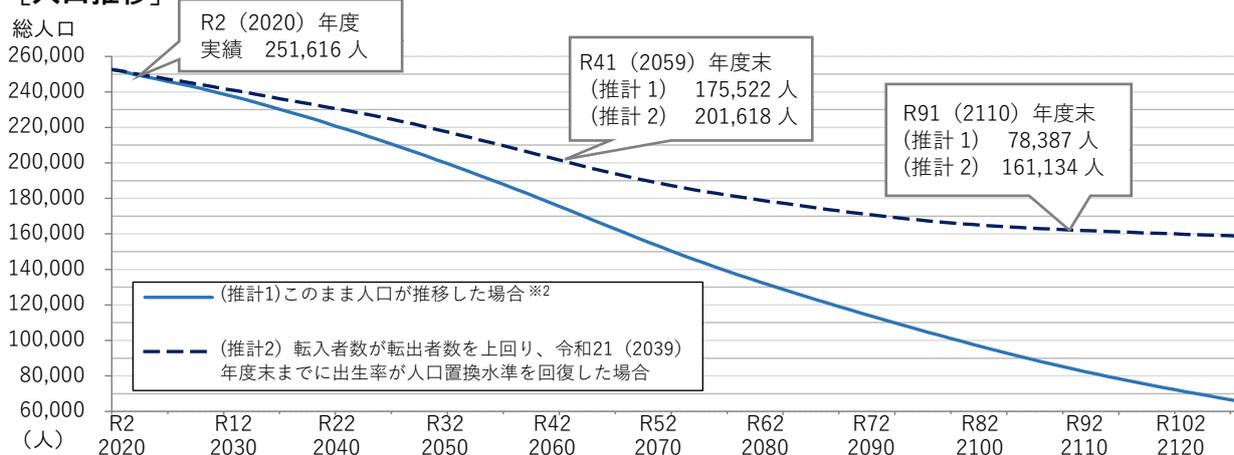
(2) 人口

明治 22 (1889) 年の町村制施行時の本市の人口は約 44,000 人、世帯数は約 7,700 世帯であり、第 1 回の国勢調査が行われた大正 9 (1920) 年には、62,947 人に増加しています。その後の市町村合併や高度経済成長に伴ってさらに増加し、昭和 55 (1980) 年には 20 万人を越え、令和 2 年度実績で、251,616 人となっています。静岡県内では、浜松市、静岡市に次ぐ 3 番目の人口規模ですが、平成 22 (2010) 年をピークに減少傾向に転じており、このまま人口が推移した場合、令和 32 (2050) 年頃に 20 万人を割り、さらに減少することが予測されていることから、その減少幅をいかに抑えていくかということが大きな課題となっています。

一方、世帯数については、昭和 40 (1965) 年は 39,097 世帯でしたが、一度も減少傾向に転じることなく増加を続けており、令和 2 年度国勢調査の速報値で 97,214 世帯となっています。

年齢別人口は、年少人口や生産年齢人口が減少する一方で、高齢人口が増加する「少子高齢化」が進行しています。同様の傾向が続き、現在 28% である本市の 65 歳以上の人口割合が、令和 13 (2031) 年には 30% を超えるものと予測されています。

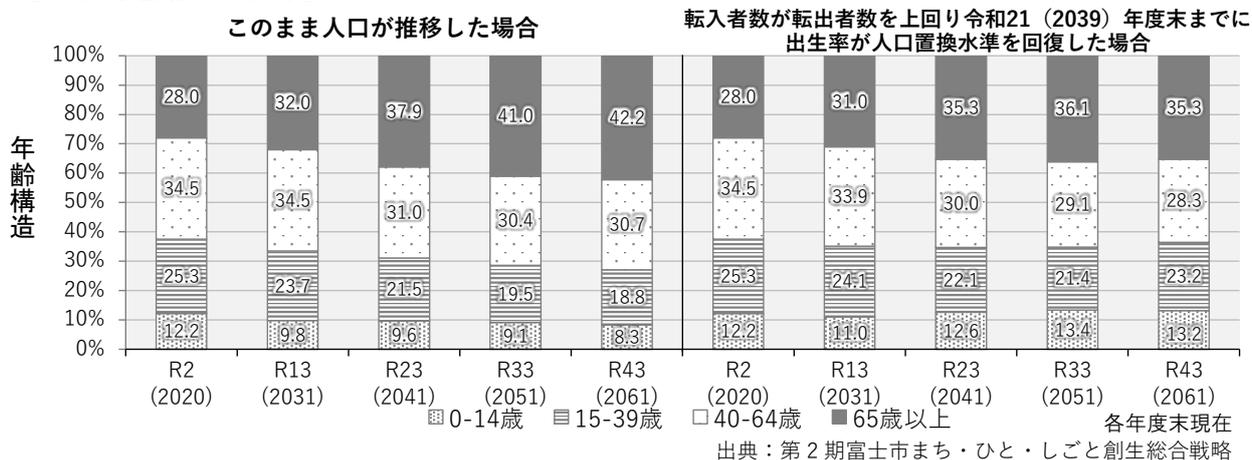
[人口推移]



※1 人口推移の長期的見通しは、住民基本台帳人口をベースに、出生率・生存率・移動率等の仮定値を用いて推計するコーホート要因法により、富士市独自に推計したものです。

※2 (推計 1) については、令和元 (2019) 年から過去 7 年間の移動率を採用し、出生率は国立社会保障・人口問題研究所の低位仮定値を補正したもので推計しています。各年度末現在

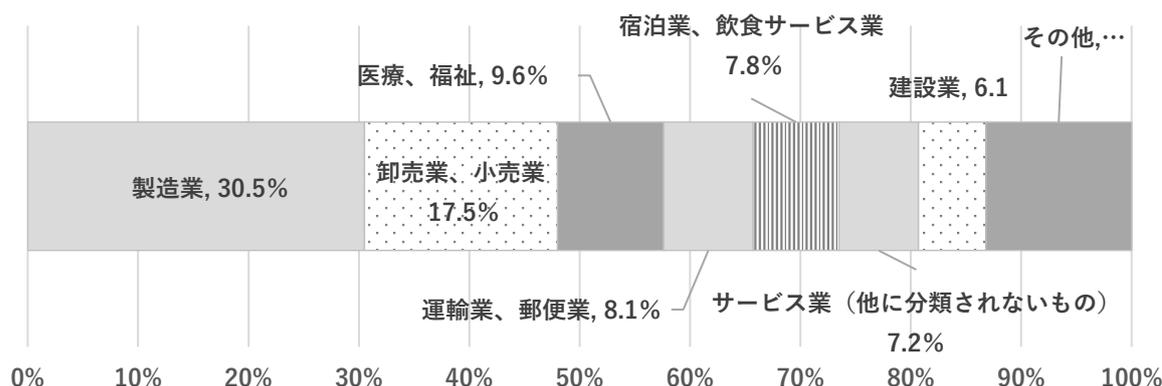
[年齢構造割合の推移]



(3) 産業

平成 28(2016)年における本市の産業分類別従事者数は、第 1 次産業が 0.3%、第 2 次産業が 36.6%、第 3 次産業が 63.2%となっており、全体の約 6 割を第 3 次産業が占めています。また、業種別にみると、製造業が 30.5%で最も多く、次いで 17.5%の卸売業・小売業、9.6%の医療・福祉、8.1%の運輸業・郵便業が続きます。

[産業分類別従事者数]



出典：平成 28 年 経済センサス活動調査報告書

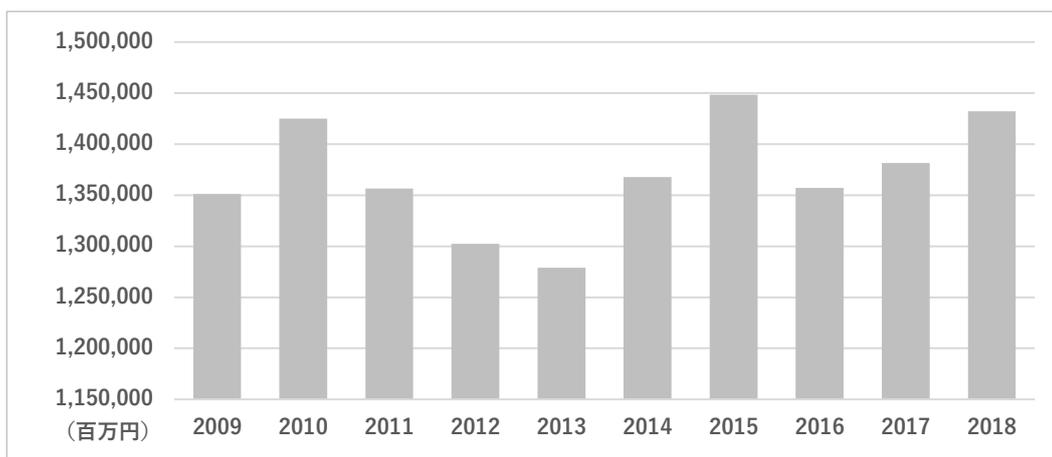
①製造業と商業（卸売業・小売業）

製造業についてしてみると、平成 30(2018)年における本市の製造品出荷額は、県内では 5 位の 1 兆 4,322 億 6,160 万円にのぼります。このうち豊富な水源を利用したパルプ・紙・紙加工品製造業の出荷額は 4,734 億 7,728 万円で、製造品出荷額全体の 3 分の 1 を占めており、製紙業が本市の主要な産業の一つであることがわかります。さらに、本市のパルプ・紙・紙加工品製造業の出荷は、全国で第 2 位となっており、まさに「紙のまち」であるといえます。

また、上記の製紙業とともに、医薬品に代表される化学工業の出荷額は 2,318 億 1,393 万円で、製造品出荷額全体の約 16%を占めています。この化学工業も豊富な湧水を活用したものであり、本市では地理的環境を活かした製造業が発展しているといえます。しかしながら、経年的な変化をみると、製造品出荷額は増加傾向にあるものの、それを担う製造業の事業者数は減少傾向が続いています。

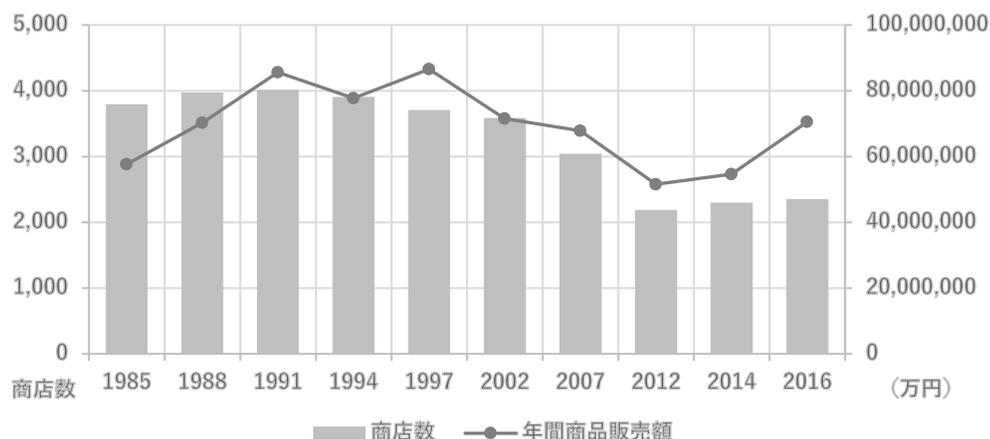
一方、卸売業・小売業についてしてみると、平成 28(2016)年における本市の商店数は 2,355 店（卸売 635 店、小売 1,720 店）、年間商品販売額は 7,054 億 8,000 万円にのぼり、平成 6(1994)年以降、平成 26(2014)年まで続いた減少傾向から転じて、増加の兆しがみられます。しかしながら、それまでの減少傾向の中では、長らく地域の商業を支えてきた小・中規模の商店の撤退があったことから、市内や周辺市町の生産地と消費地を結ぶ流通システムが大きく変化しているともいえます。

[製造品出荷額等の推移]



出典：富士市統計書（令和2年度版）

[商店数と年間商品販売額の推移]



出典：富士市統計書（令和2年度版）

②農業

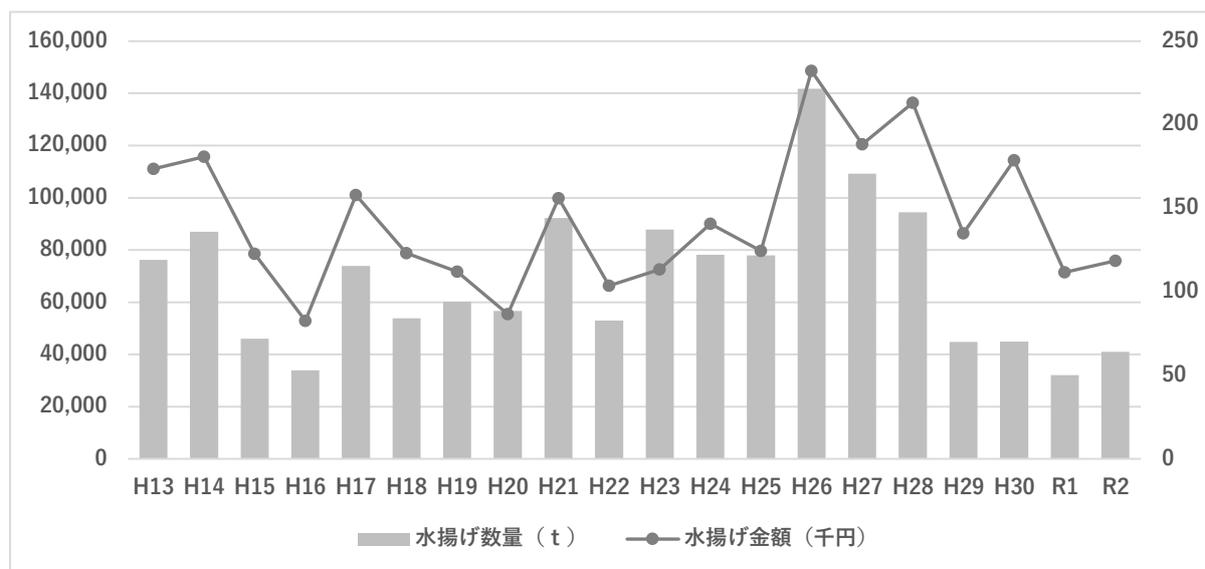
本市の農業に伴う土地利用については、一部の海岸地域を除く平坦地帯における水田利用と、富士山・愛鷹山に繋がる傾斜地、富士川地区の急傾斜地における畑地利用の二つが挙げられます。

本市の畑地利用のうち、富士山につながる傾斜地では、江戸時代から多様な作物が栽培されてきたことが確認されていますが、富士マサと称される不透水の層が存在しています。その上の黒ボクと呼ばれる作土層が薄いため、現在では、落花生などの野菜栽培などに利用され、部分的に作土層が厚い地域では茶が栽培されています。これに対して、愛鷹山につながる傾斜地では、作土層が厚いものの、傾斜が急な場所が存在することから、茶やみかんが栽培されるなど、おおむね樹園地として利用されています。同様に、富士川地区の急傾斜地では、キウイフルーツやみかんなどを中心とする樹園地となっています。このうち、茶に関しては、明治時代から積極的に栽培がおこなわれており、静岡県内においても主要な産地の一つとなっています。

徐々に改善し、現在は田子の浦漁業協同組合の組合員により、シラス舟一艘曳き^{いっそうび}を主に、刺網、観光地引網、遊漁船漁がおこなわれています。

また、同組合では、平成 21(2009)年より漁港に併設する食堂の運営を開始し、田子の浦港のシラスの知名度向上に努めた結果、平成 29(2017)年には「田子の浦しらす」が、令和 3 (2021)年には「釜揚げしらす」が地理的表示 (GI) 保護制度に登録されています。

[シラスの水揚げ数量と水揚げ金額の推移]



出典：富士市の農業（2021年）

④林業

本市の総面積 24,495ha のうち、総林野面積は 12,074ha におよび、市域のほぼ半分が林野となります。その林野を地形や所有形態から区分すると、おおむね富士山の山麓と愛鷹山の山麓の二つに分けることができます。

このうち、富士山の山麓は、江戸時代より入会地として^{まぐさば} 採炭林^{しんたんりん}の採取地として地域住民に用いられてきましたが、明治中期より紙の原料となるミツマタの栽培、明治後期からはヒノキ・スギの造林がおこなわれています。また、その所有は時代によって幕府・国・民間という形で移り変わっています。

また、愛鷹山の山麓も富士山の山麓と同様に、江戸時代より入会地として用いられてきましたが、明治中期には民有化され、特に^{うちやま} 内山とよばれる地域において、明治 35(1902)年から、治水や林業の分野で活躍した^{きんばらめいぜん} 金原明善をはじめとする静岡県山林協会の指導の下、模範林が造林されています。この模範林は、本市の大規模植林の発祥地とされ、以降ヒノキを中心とする近代的な造林が進められています。

その結果、現在の本市の林野（国有林を除く）のうち、約 80%が針葉樹の人工林、約 20%が広葉樹の天然林となっています。また、林野の約 60%が水源涵養の場、約 30%が木材生産の場

として用いられています。

なかでも、本市も含めて富士山の南麓で育てられたヒノキは、「富士ひのき」としてブランド化されていることに加え、認定された工場で生産され、販売される富士ひのきの木材は「フジヒノキメイド」のブランド名で流通されるようになっています。

⑤観光

本市には、北には富士山、南には駿河湾を望む景観に恵まれるとともに、富士川・岩本山・大淵笹場・龍巖淵・湧水など、バリエーション豊富な自然にはぐくまれるとともに、人々の生活と密接に結びついた多くの観光資源が存在しています。また、豊かな自然を巧みに利用して生産された「田子の浦しらす」や富士のお茶、富士梨、ゆで落花生、富士ヒノキなどが本市の特産品となっています。

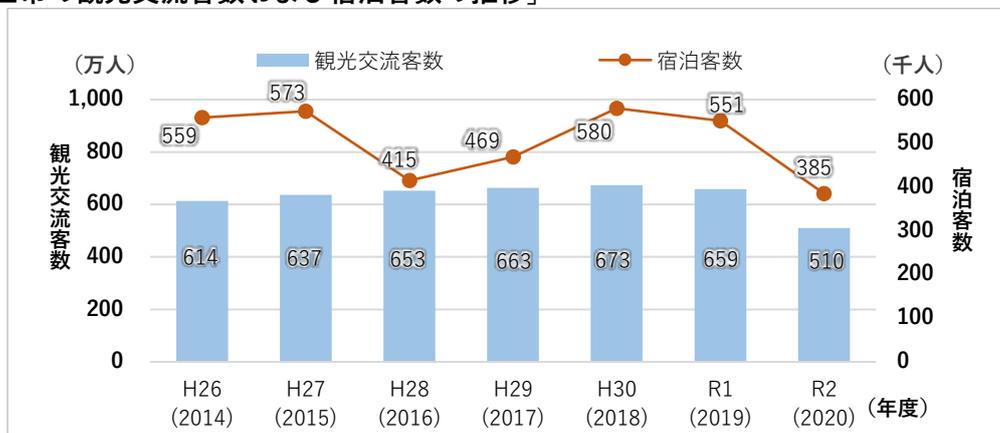
また、日本三大だるま市の一つである毘沙門天大祭で有名な妙法寺、日蓮上人の「立正安国論」草稿の地である實相寺、曾我兄弟ゆかりの曾我寺、東海道左富士の松など、古くから人々を集めてきた名所旧跡も存在しています。

さらには、本市は、東海道新幹線・東名高速道路・新東名高速道路・国道1号が市内を通るという交通アクセスに恵まれていることから、道の駅富士川楽座、道の駅富士、新富士駅に併設する商業施設といった観光インフラも整えられています。

このような観光面の特徴を持つ本市の観光交流客数は、平成24(2012)年4月に新東名高速道路が開通し、道の駅富士川楽座の利用者数が減少したため、約588万人まで減少しましたが、平成25(2013)年6月に富士山が世界文化遺産に登録されて以降、その数はおおむね増加しており、平成30(2018)年度は673万人となっています。それとともに、市内の宿泊客数も増加傾向にあり、平成30(2018)年度は58万人となっています。

しかしながら、令和2(2020)年初頭からの新型コロナウイルス感染症の拡大が本市の観光に与える影響については、注視していく必要があります。

[富士市の観光交流客数および宿泊客数の推移]



(注) 宿泊客数については、H28から調査手法の変更あり

出典：第六次富士市総合計画

(4) 土地利用

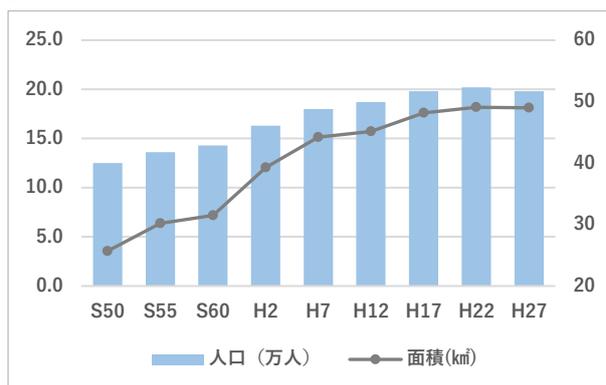
本市の DID（人口集中地区）は、平成 22(2010)年をピークに、面積・人口ともに減少に転じるとともに、DID 人口密度は年々低下してきており、平成 27(2015)年は 40.4 人/ha と、全国や静岡県の平均と比べてかなり低い水準にあります。

また、人口密度を地区別でみると、富士駅周辺や吉原中央駅周辺などの「まちなか」よりも、市街化区域の縁辺部で上昇している傾向にあります。

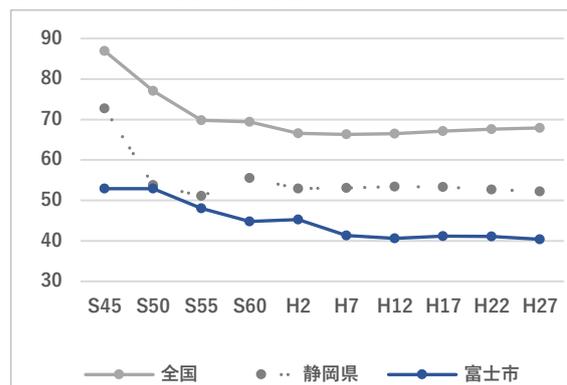
さらに、近年、「まちなか」では小・中規模の店舗が多く撤退しているのに対し、郊外の市街地等では、中・大規模の店舗が多く出店しています。

以上のことから、本市では市街地が低密度に拡散した「拡散型都市構造」が形成されているといえます。この状況が今後も続いた場合、郊外部では開発が一層進み、中心部の都市機能の集積度がますます低下することが予想されますが、新型コロナウイルス感染症拡大等の影響により、店舗の撤退や、出店等による開発がこれまでのように続いていくのかについては、注視していく必要があります。

[DID 面積と人口の推移]

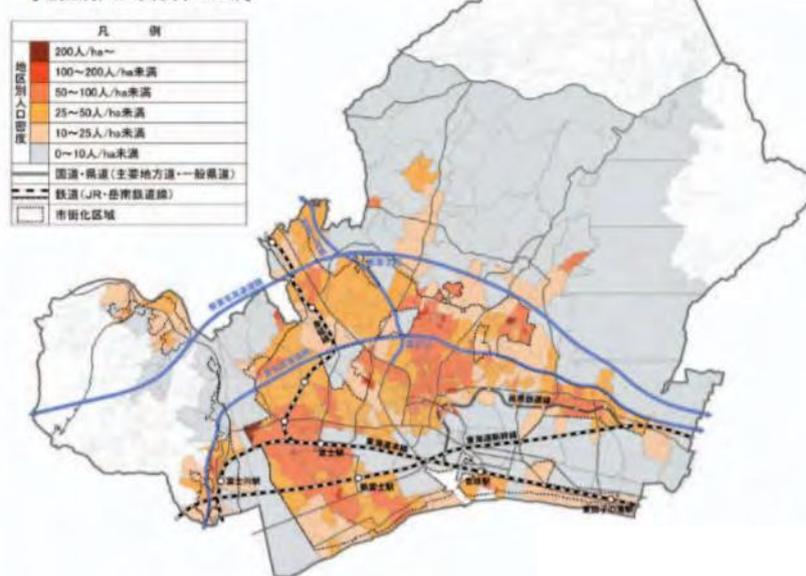


[DID 人口密度の推移]



出典：国勢調査

[地区別人口密度] [地区別人口密度(H22)]



出典：富士市都市計画マスタープラン